

日本人的クリスチャンとして生きる

鈴木直人

奨励者紹介〔すずき・なおと〕

同志社大学心理学部教授

〔研究テーマ〕感情心理学、環境心理学、精神生理学

「心の貧しい人々は、幸いである、

天の国はその人たちのものである。

悲しむ人々は、幸いである、

その人たちは慰められる。

柔和な人々は、幸いである、

その人たちは地を受け継ぐ。

義に飢え渴く人々は、幸いである、

その人たちは満たされる。

憐れみ深い人々は、幸いである、

その人たちは憐れみを受ける。

心の清い人々は、幸いである、

その人たちは神を見る。

平和を実現する人々は、幸いである、

その人たちは神の子と呼ばれる。

義のために迫害される人々は、幸いである、

天の国はその人たちのものである。

わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」

(マタイによる福音書 5章3—12節)

新たな体験で新しい自分を造る

帰命無量寿如来(きみょうむりょうじゅによらい) 南無不可思議光(なむふかしぎこう)

法蔵菩薩因位時(ほうぞうぼさついにんにじ) 在世自在王仏所(ざいせいざいおうぶつしよ)

観見諸仏浄土因(とけんしよぶつじょうどいん) 国土人天之善悪(こくどにんでんしぜんあく)

いきなり読経を始め、びっくりされたことと思います。今のお経をご存知の方はいらっしやいますでしょうか。浄土真宗大谷派、いわゆるお東さんの正信偈(しょうしんげ)というお経です。私の育った、愛知県の三河地方は、お東さんの非常に強いところで、門徒ではなくとも、多くの人たちが正信偈を上げることが

できるのです。このため、東本願寺へのお布施というのでしょうか、寄付金が一番多いところが確か愛知県だったと思います。私の子どもの頃など、お寺の境内で遊んでいると、和尚さんに寺に上がらせられ、正信偈を読まされたものでした。ちなみに私の家の本家も、代々東本願寺の末寺の檀家です。それどころか父親の名前は正信で、この正信偈から取ったものなのだそうです。このため、私の両親の葬儀は、なんのためらいもなく真宗の和尚さんに導師を勤めていただき、執り行いました。

日本人的クリスチャン

皆さんこんにちは。心理学部の鈴木です。今日の話は、多くの敬虔なクリスチャンの方が聞いたら、眉をひそめるような話だと思います。ひょっとしたらもう二度と人前でクリスチャンと言うなどお叱りを受けるかもしれません。しかし、私は、今からお話するように、極めて日本人的なクリスチャンとしての生活を送ってきました。私は、40年ほど前に日本キリスト教団京都教会で、当時の原牧師より洗礼を受けました。その意味では、れっきとしたクリスチャンです。すなわち聖餐式にも出席し、キリストの血であるぶどう酒、身体であるパンを食べることができる陪餐会員です。しかしながら、「鈴木さんはクリスチャンなのですか」と聞かれると、よく「似非クリスチャンです」と半分自嘲気味に、半分真面目に答えてしまいます。私の家はクリスチャンの家庭ではありません。私の家族、親戚のどこを探してもクリスチャンはいません。そんな家庭ですので、私の家には仏壇があります。そして時には正信偈のお経を上げます。そして祝詞(のりと)はあげられませんが、神棚もあります。何故そういうものが家にあるかというと、妻も子供たちもクリスチャンではないからです。家族は、普通の日本人の多くの人々がそうであるように、正月には初詣に行き、神様にいろいろなお願いをし、御神籤の結果に一喜一憂し、結婚式やクリスマスでは突然、ずっとクリスチャンであったかのような真実をし、お葬式は仏式で執り行うという、典型的な日本人なのです。私は、こういう環境の中で生活してきました。クリスチャンになってから、つい最近まで、家族と初詣に行き、柏手(かしわで)を打つべきか迷い続けてきました。法事や葬儀で、読経するのも迷いました。お葬式に行くとき数珠を持っていくべきなのか、いつも迷ってきました。葬式で、牧師でもある野本前理事長が、数珠を手にお焼香をするのかどうか、そっと垣間見ていたようなこともありました。しかし、今は、郷に入ったら、郷に従うことにしました。初詣に行けば拝殿に向かって頭をさげ、柏手を打ち、お葬式や法事では数珠を手に出席し、真宗なら一緒に正信偈を読経することにいたしました。しかし、正直なところ、「これでいいのだろうか」という思いと、「これでいいのだ」という思いの葛藤が今でも続いています。

宗教はみな同じ

郷に入ったら、郷に従えと思うようになったきっかけは、父の死と祇園祭の長刀鉾の稚児のお祖父さん役を二度にわたって務めたことでした。父の葬儀は先ほど触れましたように、当然のように真宗大谷派で執り行いました。喪主として正信偈の読経をし、お線香も上げ、お坊さんのお説教も聴きました。ちょうど、キリスト教文化センターの所長の時でしたが、お坊さんのお話が、礼拝やチャペル・アワーの奨励で聞くお話と極めてよく似ており、仏さまを主イエス・キリストに置き換えると、ほとんど同じような内容であることに気がきました。お坊さんにその旨を言ったところ「そうですよ、宗教は皆同じですよ」という答えでした。同じ言葉を、小学校の校長をしていた時、入学試験でも聞きました。

親子面接に袈裟を着て来られたお父様が複数いらっしゃいました。聞けば、京都、滋賀の有名なお寺の塔頭(たちゅう)のご住職でした。私はおずおずと聞きました。「あの一、私どもの方は、問題はないのですが同志社小学校はクリスチャンの学園ですので、毎朝礼拝があり、聖書を学ぶ時間もあります。それでも問題はありますか」。答えは異口同音に「かまいません、宗教は皆同じです」でした。

祇園祭の長刀鉾のお祖父さん役、これは私の人生の中、小学校の校長と並んで、面白かった出来事の一つでした。この話が舞い込んできた時、私は思わず聞きました。「私がかまいませんが、私は一応クリスチャンです。クリスチャンの私が、神事の中でこのような役をしても問題はないのでしょうか」。返ってきた答えは「いろんな人がいますので、かまいません」というものでした。祇園祭は神事であり、神様に対する礼に始まり礼に終わるものです。行事があるたびに二礼二拍手一礼、長刀鉾会館や八坂神社に入って二礼二拍手一礼、建物から出る前に二礼二拍手一礼。こうした生活が毎日ではありませんが、約1カ月半。これを2回も行ったのですから、神様の前で拍手を打つことにはほとんど抵抗がなくなってしまいました。

クリスチャンとしての義務

自分が似非クリスチャンであると私が思う理由は、今まで述べてきたような、仏壇の前でお経を上げ、神社で拍手(かしわで)を打ったりすることではありません。クリスチャンには、クリスチャンとしての役割というのか、義務というのかがあるように思います。それは、奉仕活動と宣教活動、そして寄付をすることだと思えます。これは別にキリスト教に限ったものではなく、多くの宗教がそうであると思えます。奉仕活動というのは、何をもって奉仕活動というのか非常に微妙です。例えば今日こうしてチャペル・アワーで奨励を行っているのも奉仕活動と言えないこともありません。一番の問題は、私はクリスチャンになって以来、一度として、誰に対しても、宣教活動といえますか、クリスチャンになるように勧めたことがなく、教会に誘ったこともないことです。それどころか、今は亡きある先生にクリスマス礼拝に誘われた人から「先生からクリスマス礼拝に誘われたのですけど、行かなくてはいけませんか」と相談を受けた時、「やめとき、行く必要はないよ」と言ったことさえあることです。そもそもなんらかの宗教を信じるかどうかはその人の精神上の問題であり、他人がとやかく言う問題ではないと思えます。本人が教会へ行ってみたくて連れて行ってくれと言うのならもちろん案内しますが、誰かに言われて、関係性でしぶしぶ行くのなら、行かないほうがましだとさえ思っています。これは家族に対しても同じで、娘が行きたいと言うので教会に連れて行ったことが数回ありましたが、家内も、息子も一度として教会に足を向けたことはありませんし、私からキリスト教の話をしたこともありません。

こうした考え方、態度は、敬虔なクリスチャンの人からすれば、唾棄すべき考え方ということになるのだと思えます。自分が信じている宗教は、すばらしいものであるから、ぜひとも他の人も同じように信じてもらいたいというのが、信徒の正しい、当然の考え方ではないかと思えます。でも、私は、そうは思えないのです。信心が浅いからだと言われれば、反論の余地はありません。ただ、私の根底には多神教的な考え方が脈々と流れていることが原因かもしれせん。

日本的風土は多神教

新島が同志社英学校の第一回卒業式で卒業生に送った有名な「Go, go, go in peace. Be strong! Mysterious Hand guide you!」という言葉、あれは、ある学生が書き取ったものですので、will が入るべきだとか、単数形にすべきだ、いや複数形だと論議されたことがあるようですが、今となっては新島がどのように語ったのかわかりません。ちなみにハーディーホールに掲げてある言葉には will が入っていたように思いますが、違いましたでしょうか。それはともかくとして、新島は何故、mysterious hand 見えざる手とでも訳せばいいのでしょうか、という単語を用い God という単語を使わなかったのでしょうか。非常にうがった見方だとお叱りを受けるかもしれませんが、新島の心の片隅にも日本的な精神が残っていたのではないのでしょうか。そのため God 以外もひっくるめて mysterious hand という表現をしたのではないかと考えてなりません。

和辻哲郎氏が著した『風土—人間学的考察—』（岩波書店 1935年）という本があります。その本によれば、日本人はモンスーン型の気質をもち、自然の猛威に耐え、忍耐強く、受容的であるというようなことが書かれています。この指摘は、日本人について考える時、重要な指摘ではないかと思えます。日本は、昔から台風や地震、津波そして集中豪雨など自然災害に襲われ、日本人は、こうした自然災害に抗うのではなく、その事実を受け入れ、長いものに巻かれ、強いものに従うという、親方日の丸的な民族的気質をもつようになったのだと思えます。すなわち自然の中の大きな力、人為的にも大きな力をもつ存在、あるいは恨みを買うような仕打ちをしてしまった相手、それは多くの場合、畏怖するものであったと思えますが、そうしたものは全て神に祭り上げることで、なだめ、自分たちに害を為すのをやめさせ、逆に守ってもらうことすら求めてきたのだと思えます。こうした考え方が、多神教という形で、日本人の精神生活の底流に脈々と流れてきているのではないのでしょうか。同様に、宗教に対する日本人の寛容さ、悪く言うと「いい加減さ」、実は「いい、加減さ」はここから生まれているのではないかと思えます。日本人を考える時、この視点をもたずに、西洋から輸入した学問的知識で捉えようとする、見誤ることになるのではないかと思えます。

エピローグ

もうかなり前になりますので、記憶はかなり曖昧ですが、神戸にいろいろな国の、いろいろな民族、いろいろな宗教を信じる人々が、気軽に集まり、気軽に話をする喫茶店があるということをラジオで紹介していました。これは宗教に対して寛容な、あまり教条的にならない、多神教的精神を心の底にもつ日本だからこそできる、すばらしい事柄ではないかと思えます。先日亡くなったムハマド・アリ氏の葬儀には、クリスチャンも、イスラム教徒も、ユダヤ教徒も、そしてアメリカの先住民までもがアリを偲んでその遺徳を称えたそうです。世界の争いごとの多くが宗教に関わる問題であるとよく指摘されます。世界の民族が、日本人的な考え方やアリのように差別に抗うようになれば、あの忌まわしい宗教戦争もなくなるでしょう。世界紛争のかなりの部分がなくなると思えます。人に迷惑をかけないのであるなら、他人が何を信じようといいいではないですか。何故、自分の信じる宗教を広めなければならないのでしょうか。信じたくない人は信じなくてもいいのではないのでしょうか。何故仲間を増やさないといけないのでしょうか。何故他人が信じるものを認められないのでしょうか。それは多分に、自分の信じる道、あるいは自分の考え方が一番正しいとする考え方を他人に押し付けるが故のなせる業だと思えます。私はたとえそれが、正当なキリスト教徒

の考え方ではないとしても、自分の良心に従って生きる、他の考え方の存在を認めることのできる、また人には人の帰依する神が存在することをも受け入れることのできるクリスチャンでありたいと思います。

2016年6月15日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録